

セッション事後報告書 「社会研究所と批判理論の100年（3）——レクヴィッツとローザへの展開」

開催日時：10月19日（日）15:00～17:00

開催場所：青山学院大学相模原キャンパス

参加人数：30名ほど（登壇者除く）

登壇者：世話人 橋本紘樹（九州大学）

司会 宮本真也（明治大学）

報告者 出口剛司（東京大学） 橋本紘樹

討論者 野口雅弘（成蹊大学）

報告概要：

長らくドイツの現代社会理論としては、ハーバーマスやホネットに代表される「批判理論」とルーマンの「社会システム理論」が支配的であった。しかしながら、ドイツ語圏の言説空間は決してそこで停滞しているわけではない。21世紀に入りますます複雑化する社会を前に、彼らのアプローチと批判的に対峙しながら「近代社会」の全貌を捉え、そこから現代の諸問題を浮き彫りにしようとする試みが数多くなされている。なかでも、『独自性の社会——近代の構造転換』（2017；邦訳、岩波書店 2025年）で躍有名になったアンドレアス・レクヴィッツと『加速する社会——近代の時間構造の変容』（2003；邦訳、福村出版 2022年）や『共鳴——世界関係の社会学』（2019）で著名なハルトムート・ローザは、アカデミズムを超えて、広く政治的公共圏に大きな影響を及ぼしており、現代ドイツの社会理論を語る上で不可欠の存在である。

そこで本セッションでは、「批判理論」を一つの参照軸に据えて両者の理論的バックボーンを抑えつつ、その理論的射程と政治的波及力を紹介することを目標に、① 出口がローザを、② 橋本がレクヴィッツを、③ 野口が討論者として問題提起を行う形で報告を行い、その後、フロアからの質疑応答へとうつった。

① 出口報告は、フランクフルト学派の理論展開において、エーリッヒ・フロムに始まり、アクセル・ホネット、ハルトムート・ローザに至る潮流を「自由の社会的存在論」として再構成し、メインストリームに対する「地下水脈」を形作っていることを主張するものであった。とくに、批判理論の主流が強い存在判断を回避し、認識論的なイデオロギー批判、形式的倫理学に向かう傾向をもつてのに対し、上記の理論家たちは、人間における「自由」を規範的基礎とし、実質的な社会批判と「善き生」（自由な自己実現）の構想を展開したことが示された。

② 橋本報告では、アンドレアス・レクヴィッツの「批判的分析学」の「実践論的」方法論を、アドルノやベンヤミンといった「フランクフルト学派」第1世代を参考しつつ浮き上がらせ、その後、主著『独自性の社会』および『喪失——近代の根本問題』（2024）を読み解き、その思想の全貌を明らかにすることを試みた。そして書評などを通じてその妥当性を検討するとともに、政治分野における受容にも着目し、現代社会の問題への接続を図り、「近代論」と「自己省察的理論」という点から「批判理論」との親和性（およびそのアクチュアリティー）を確認した。

③ とくにマックス・ウェーバーと対比することで、ハルトムート・ローザの『加速する社会』とアンドレアス・レクヴィッツ『独自性の社会』が描き出す「後期近代」を整理したうえで、野口は討論者としてコメント・質問をした。そもそもローザとレクヴィッツがフランクフルト学派に属するのかについては議論の余地

がある。しかし、ウェーバーを批判し、ウェーバーを踏み台にしながら、それとは別の可能性を探求するという点において、彼らは批判理論の知的伝統を引き継いでいる。ローザの超高速静止と「鉄の檻」の関係、そして独自性による分断を乗り越えるべくレクヴィッツが提唱する「普遍性の実行 (doing universality)」とウェーバーの官僚制論における形式合理性の関係などについて、活発な議論が行われた。

以下は、討論者とフロアからの質問に対する、それぞれの応答である（④ 出口、⑤ 橋本）。

④ 討論者からは、フランクフルト学派におけるマックス・ウェーバーの解釈や位置づけ、ローザの加速理論とヴァルター・ベンヤミンの歴史哲学に関する問題提起がなされた。

討論者の問題提起を通して、以下のことが明らかとなった。ウェーバーの位置付けに関して、形式合理性の優位、自由と意味の喪失テーマ、官僚制批判などが、時にウェーバー自身の理論を逸脱しながら過度に強調される傾向があった。また加速の急ブレーキに対するローザの消極的見方は、ベンヤミンの歴史哲学テーマ（ゼネストによる社会的機能の停止）を前提とすると、なるほど保守的であるものの、急ブレーキはむしろ、社会システムに打撃を与えるだけでなく、ゼネストによって解消されるべき階級格差をさらに拡大、顕在化するという逆説的效果を有する。

フロアからは、フロムにおける二項対立的思考に対する疑問、英語・ドイツ語の原語における「自由からの逃走」の意味、ホネットとフロムの関係を問う質問が投げかけられ、社会的存在論に対するさらなる議論が展開された。

⑤ 討論者からは、レクヴィッツがウェーバーに依拠しつつ提示した「一般的なものの社会論理」の後期近代における「危機」が、「インフラ」にまで及んでいるのではないか、という点と、解決策である「普遍性の実行」はいかにして可能なのか、という点が問題として挙げられた。

前者にかんして、後期近代においてはインフラが「独自性」を生み出す装置として機能しており、万人に共通のものを生み出すものではなくなったこともレクヴィッツは問題視していることを指摘した。後者については、フランスのストラスブルにおける宗教への政治的取り組みに言及し、「閉じた枠組み」の中で「普遍性」を追求する可能性について言及した。

フロアからは、「独自性」と訳した「*Singularität*」に、人工知能などの文脈で用いられる「シンギュラリティ（特異点）」の意味があるのかどうかという質問や、レクヴィッツのマルクス受容についての質問がなされ、活発に議論を行った。

全体を通じて非常に有意義なセッションとなり、今後「社会研究所」と「批判理論」の研究をさらに進めて行く上で極めて大切な場となった。あらためて、討論者である野口雅弘先生とご参加いただいた学会員のみなさまに、心よりの感謝を申し上げたい。